

上映映画解説

1957, 10~11

国立近代美術館 フィルム・ライブラリー



No. 50

若い人

「若い人」の特別鑑賞会について

フィルム・ライブラリーの特別鑑賞会では、一般の映画愛好者、研究家のために、古典映画をとりあげてきましたが、今回はその第三〇回として、一月二日から一月一〇日まで、毎週二回(日・水曜日の二時)豊田四郎の「若い人」を上映します。

若い人

一〇巻

東京発声一九三七年度作品

原作……………石坂洋次郎
脚色……………八田 尚之
監督……………豊田 四郎
撮影……………小倉 金弥
美術……………河野 鷹思
音楽……………塩入 龜輔
聖樂……………津川 圭一

—— キャスト ——

間崎慎太郎……………大日方 伝
江波恵子……………市川 春代
恵子の母……………英 百合子
橋本スミ……………夏川 静江
橋本の義母……………林 千歳
山形先生……………伊藤 智子
下宿の小母さん……………井上千枝子
視学官……………押本 映治
山川博士……………松林清三郎
看護婦……………細川 和子

解説

「若い人」は、三田文学に連載された石坂洋次郎の小説から映画化されたもので、豊田四郎が監督した。昭和十二年(一九三七)一月一七日に、日比谷、新宿、東横映画劇場で封入され、非常に好評で、豊田四郎がその後文芸映画のジャンルに活躍するようになった記念すべき作品。(キネマ旬報ベスト・テン第六位)。今回上映するフィルムは、東宝に保存されていたネガから特に当館フィルム・ライブラリーのために新し

くプリントされたものである。なお、戦後一九五二年に東宝で再映画化されている。

因みにキネマ旬報第六二二二号(昭二二・九・一一)に紹介、同第六三二二二号(昭二二・一一・一一)に批評がそれぞれ掲載されている。

「若い人」と豊田四郎

飯島 正

豊田四郎は、『若い人』(昭12)を出世作として、戦前のトオキイ映画界で文芸映画のチャンピオンとなつたが、映画界にはいつたのは、無声映画の後期からで、師事したのは島津保次郎であった。『若い人』以前には、沖繩の伝説をとりあつた『オヤケアカハチ』(昭12)の異色篇がある。

『若い人』は、石坂洋次郎の小説の映画化である。脚色は、八田尚之、撮影は小倉金弥、音楽は、塩入龜輔、美術は、河野鷹思である。当時のほくのノートにこう書いてある。

「石坂洋次郎の小説は、『三田文学』に連載され、のち単行本になったのであるが、ほくは『三田文学』連載当時ひろい読みをしたきりで、まとめて読んではいない。それゆえ、いまそれを原作にした映画ともとの小説とを比較してものをいうことはさしひかえる。外人資本のミッシヨン・スタウルの生徒に、江波恵子(市川春代)という少女がいた。父を知らない子として生まれた彼女は、性質が非常にひねくれていたが、そのかわりに、妙に反抗的な正義観をもっていた。母親(英百合子)は客商売の女だったので、そういう恵子の心理に同情がなかった。

間崎(大日方伝)という男の教師が恵子の生活を気の毒におもひ、できるだけ彼女を理解し、いい方にみちびこうとしていた。

間崎の同僚の女教師に橋本(夏川静江)という女がいた。彼女は間崎に好意をもっていたが、恵子に対する間崎の好意を誤解していた。こういふ一種の心理的三角関係から、この映画の筋

は成立している。それだけに筋をのべようとすれば細部にわたらなければならぬから、ここでは省略する。

事件としては修学旅行中の間崎と恵子のあいだからやがて恵子が妊娠している噂がたつたこと、実は恵子は潔白なのだが、自分の父親を他の男から知りたいたいという気持をおこすことなどが重要である。

日本映画としては、これだけ複雑な心理をえがこうとしたこと自体が、稀有な現象であり、この映画が、そのうえに、相当の程度にまで女主人公の複雑な気もちをだしているとしたならば、この映画が、出来ばえの点はともかくとして、見おわたのち、かなりつよい印象をのこすことは事実である。

ことに、配役をよくえらび、できるだけせりふによる説明をさけ、俳優みずからその心理を感覚的に表現させようとした心づかいは、ほめていい。

市川春代がこの恵子の役をやるとき、ほくはこれほどのいい演技を見せようとはおもわなかった。事実、彼女としては、まるで生まれかわつたようなすばらしい演技である。全身でぶつかるようなあらしかたである。この映画の恵子の役がこれだけおもしろいのは、一に市川春代のおかげであるといつても過言ではない。大日方伝、夏川静江、英百合子もみない出来で、全体としての雰囲気はふさわしい。八田尚之の脚色は、山気がなく、質実である。多少の冗長さはしかたがあるまい。豊田四郎の監督また著実で、ケレンがなく、注意がよくくばられている。

傑作とはいえないが、驚業ある佳作であろう。ただ、この種のもが無責任にこれからつくられる傾向を『若い人』が助成することは警戒したい。

『若い人』は、映画そのものの出来よりも、その題材がわかいひとたち——特に当時の——にアピールする点と市川春代の演技とによって、非常な人気を獲得したものとおもわれる。だがそれが、すでにほくが警告したように、やや無定見な文芸映画の製作に拍車をかける結果となつたことは事実だが、それによって、統制下の日本映画に、ともかくにも人間性を主題にした映画の一系列をある程度絶やさない功績は、十分にみとめられなければならないとおもう。